

求められる学—文明学考

浅見 聡

文明学科とは何であろうか。そもそも文明学とは果たして何であろうか。さらにその学的対象たる文明とは何であろうか。

様々な分野に分化している既成の学問体系は、その研究対象及びその研究方法によって区別されている。例えば歴史学は人間の過去の営為を様々な角度から検証し、意味づけをしようとしているし、例えば政治学は市民社会の在り様を分析し、権力の解明を試みながら在りうべき市民社会の姿を指さすものである。自然諸科学は、自然を計量化し明確な説明を試みるものである。それでは文明学はどうであろうか。

文明学の要請

文明学の誕生は、そもそも現代的関心からといえる。

文明 (civilization) の原義にも係わる、公的な知について現代ほど抜き差しならない再考を求められている時はない。我々が今入手し得る情報のどれをとっても、その背後にある政治・経済・民族・資源・エネルギー等の諸問題の危機的状況を抜きに語ることはできないのである。このことは我々に二つの点を示している。まず第一に我々は世界の情報を身近な問題としてとらえられる程

多くの情報に取り囲まれていることだ。こうした状況は世界の認識の地平を新たに開いてくれた源である。しかしながら昨今の学問における無限な細分化・専門化にも看取できるように、我々は膨大な情報の洪水の中にしばしば溺れてしまい、その総合的把握を困難にしている。

第二に、危機的状況を孕んだ諸情報を我々が常に受けとるということは、我々が世界の成員であり、地球は我々の「有限な家」であるという前提に基づき、よりよい世界を志向しつつ我々自身歩んでゆかねばならないことを示している点である。この点において学問はやはり創造的でなければならず、よりよい未来を志向し、指針となるという意味で実効性が要求されている。高度な技術も知的遊戯では困るのである。

チェルノブイリ (原子力発電所の爆発事故。一九八六年四月。) に象徴される資源・エネルギー需給に関する根本的問題。今年 (一九八九年。奇しくもフランス革命二〇〇周年の年にあたる。) 一月のベルリンの壁崩壊に象徴される政治・イデオロギー体制の変動。こうしたテーマに対して人類史的な地平で、各々の出来事を連関的に考察し、未来への指針を与えることができる学問。

少なくともそうした態度を成果の内に看取できる学問。これが現代的関心の要請する学問であろう。そして我々はこの学問を文明学と名付けるのである。

文明のとらえ方

文明学の学的対象たる「文明」について少し考えてみよう。もちろん文明学の性格から「文明」とは何かという確定は、ここではできない。

文明という概念については、本学会における前回のシンポジウム「これからの文明学科」（一九八九年五月）において、本学の松本亮三先生が整理・解説なさっておられるので御覧されたい（学会誌『文明研究』第八号所収）。浅学の者が先学達の助けを借りつつ付言するとすれば、文明（civilization）という語義についてだろ。

既に知られているように、文明と邦訳される civilization は、文化と邦訳される culture がしばしば対比されるいは同一視されている。一八世紀においてようやく市民権を得たといつてよい civilization は、その初期用例においては、「人々の立居振舞・社会の風俗をより上品に、都市風に変えること。人々の礼儀作法の規則を内発的に守らせるようにする努力。」などを意味していた。すなわち、ある社会的状態に到る過程として、動詞的な意味あいを持っていた。この文明の意味が行動様式の洗練であったのは、それが社会的発展の度合を計る基準だったからであり、当

時 civilization の同義語が洗練（refinement）であったり丁寧さ（politeness）であったりしたことからもその性格が推測できる。

これに対して文化（culture）は本来文明の一側面としてあるはずであったものが、特に一八世紀ドイツにおいて特別な位置を占めるようになったのである。イギリス・フランスでは当時既に宮廷社会を頂点とする社会全体の上層を占める——すなわち上述の civilization の使用者たる——人々の中に、ブルジョワや知識人達が組み込まれていた。しかしヨーロッパにおける文明の後進国ドイツでは、そうした社会の上層部、政治を左右し得る部分には王侯貴族のみが居座わり、本来の文化の担い手であり社会全体への文明のスポークスマンたるブルジョワや知識人達は参与することができなかったのである。大学を中心として、彼ら中層部の人々は宮廷社会のあり様を当然批判するようになり、精神的な世界への関心に自らのアイデンティティを求めようになった。彼らが批判の対象とした宮廷社会こそ、当時の文明（civilization）の頂点であったわけで、このことから彼らは自らの抛り所として、文明に対して文化（culture、ドイツ語では Kultur）という概念を民族的特質と結びついた、より精神的なものとして定着させていったのである。

ここで文明と文化の問題について、語義の点から多少なりとも述べてきたのは、そもそも文明という名で一つであった語が二つに分化してしまったこの事実が、そのまま文明という概念の持つ二つの意義もしくは側面を表わしているのではないかと思われる

からである。すなわち、その初期の用例が示すような「行動様式の洗練」も含め文明とは、「進歩」の思想につながる生活水準の全般的向上を意味する場合がまず第一にある。第二に文明を民族や精神と結びつけ、これがある民族やある特定の風土や時代における人間の精神のおよび物質的な存在様態の全体を意味するものとみる場合があるということだ。そこで次にこの文明の二つのとらえ方に沿って、文明学を考えてみようと思う。

文明理論と個別的文明研究

文明の第一のとらえ方である、進歩思想に裏打ちされた生活水準の全般的な向上、という概念を学的対象とする時、文明学はあらゆる個別的事実をその脈絡において検証もしくは説明することになる。そしてその作業はすべて結果的に現在の研究対象へ収斂する。現代文明の諸問題に、おそらく最も具体的直接的にかかわってゆく作業とならう。しかし当然のことであるが、諸問題の解決にはその対象についての検証ないし説明が新たな地平で構築され直されることが不可欠である。特に進歩思想に様々な反省が加えられ、近代と近代以降について多くが語られる昨今にあつてはなおさらである。

進歩観というものは我々に、絶望に耐え、失敗を認めず、輝ける未来を確信させるものである。そしてまたそれは、ヨーロッパ文化の根であるキリスト教の「救済」から導き出されたものと思われる。

一九世紀はこの進歩観に支えられた科学技術の時代であった。思想的にみても、近代の思想は科学を成立させるような認識論から出発することが急務であった。つまり自然と人間世界との法則を知るための土台作りが必要であったわけである。ホップズやデカルトにみられる理性というのは、いわば生産主義的理性ともいべきもので、そこにおいては、「認識することと制作すること、真理を知ることと創ることは各々同じ」なのである。この近代的理性（生産主義的理性）では思考過程（図式）を対象に移し換える作業、すなわち対象化が要求され、対象化できないものを排除しているのである。

さてしかし輝ける未来への展望はそう永くは持ち続けられなかった。近代の終焉である。原爆・公害・自然破壊を生み出した科学技術への不信、近代的理性が対象化できなかつた他者の排除そしてホロコースト、社会主義イデオロギーが掲げた救済への幻滅、こうした事実を突きつけられて我々は今、輝かしい人類の歴史の成就の一步手前にいるのではなく闇にあることを知るのである。

ここに進歩観は否定され、我々が文明の側面としてみていた生活全般の向上は根本から危うくなった。

実は一見自らその文明の意義を葬り去つたように見えるままでの記述が、当の文明の意義をその方法論において明確化しているのである。すなわち我々は進歩の思想を作り替えることによつて「よりよい方向」をやはり用意しているのである。そしてこの構築・脱構築の繰り返しは、輝ける未来を予想してはいないが、

よりよい生活の指針ないしは進歩思想によって今や閉塞の状況に陥っている文明の突破口と成り得るのである。このように、個別の事例を採り上げつつ、文明をその基底要件から構造的に解釈し理論化する方法をここで我々は文明理論と呼びたいと思う。

それでは文明の第二のとりえ方、特定の時代、地域あるいは民族の物質的生産的所産を文明とみる時、我々は文明学としてどのような態度でそれを研究してゆくべきであろうか。もとよりその対象とする文明の歴史性・地域性・民族性を深く考察することが肝要であるし、また各々の考察は独立した研究として立派な業績となる。しかし同時に我々は個別的な各々の文明の内的な関係を不問に附してはいけない。そうしなければ相對主義に陥るばかりであろう。各時代・各地域・各民族の文明にあつて、しかも時空を超越するものを読みとる努力が必要なのである。過去において、例えばヘーゲルが「絶対精神 (Absoluter Geist)」と名付けたところのもの、あるいはランケが「神に直接する (Unmittelbar zu Gott)」という言葉で表した概念、などは言うなれば文明学の先達が諸文明の内に見出してきたものなのだ。

それではこの意味において、我々が諸文明を理解するためにはどうしたらよいのか。

そもそも人間同志の間で「わかる」というのには、それに先立つ根源的な「了解」があるはずである。しかしその「了解」やその客観的相としての「解釈」はそれが学として成り立つ方法論は確立されていない。ところが事実として、例えば日本文明におい

ても、外来の文明を、すべてではないが、いつの間にか日本化しているように、一種の文明総合のような作用が存在している。そこで我々が、諸文明の違いはそれとして、特殊を普遍化することなく、明確に認識するためには、比較的方法を用いる必要がある。換言するならば、個別的文明研究には、文明学として、比較的方法があわせて用いられる必要があるということである。

いま一度繰り返すが、学問としての文明学は諸文明についての、あるいは諸学問の、知識の寄せ集めではない。その終局的目標は諸文明・諸学問の総合的把握である。しかるが故に個別的な文明研究においても、それはそれとして評価し、さらに比較的研究をも成す必要があるのだ。文明理論について先に述べたが、やはり文明学の本質的なものは、諸学問 (個別研究) の対象としている各々の事物の内に帰属し入り、あらゆる反省的活動を総括し、存在するものへの学的アプローチの諸根拠と諸前提をコンテクストにおいて把握せんと試み、方法的な帰結において叙述せんと試みることにある。そこで文明理論も諸学問の交通整理、指針であるにとどまらず、その仕事においては対象認識と同様に途上にとどまる。文明とは何か、諸学問の総合としての文明学は何かという問いに対して完結的な確定は存在しない。存在するのはただ絶えず新たになされる省察のみである。この意味においては文明学「そのもの」といったものは存在しないことになるが、このような継続的な修正と尖鋭化とへ開かれ続けておらねばならないような文明学的省察が無ければ、個別研究としての諸学問の全体設計

にかかわる方法的意義や学問対象の基礎的な限定はなされ得えないはずである。

文明学は諸学問と密接な関係にあるが故に、歴史的側面をも有している。またそれは何よりも文明学が現実の問題に深く関わっていることを意味している。それどころか文明学は個別な学問をも越えて実践の問題に係わってくるのである。すなわち我々が回りの世界とどう生きてゆくか、という問題を提出した時、確かに「学問」は価値から人を自由にしてはくれるが、それ以上の答えは示してくれない。「どうしたらよいか」とか「どうすべきか」という価値基準、倫理の問題に対して、文明学は動機となる。それは何よりも文明学が、ラディカルな諸反省の必要性についての意識を絶えず覚醒させる性格を有しているからである。

文明学科のあり方

現代の危機意識の下に要請される文明学は以上述べてきたように、諸学問の総合的認識を目ざし、未来への指針となるべき学問である。そしてこれを具体的なたちで構築してゆく場として、文明学科は存在する。したがって文明学科に関与する者は絶えずその理念を念頭に置かねばならないだろう。その上で、まず各々の学問対象による個別研究を為すことである。

個別研究は単独で学問として成立するが故に、他の個別研究との通路を閉じる傾向がある。文明学はやはり、個別研究相互の対話がなければ成立しにくいであろう。したがって文明学を念頭に

おいた個別研究は、内的関連の探究（比較研究）を個々に用意しつつ、各個別研究が共働してあるテーマを追求してゆくことが要求されるのではないか。そうなるや個別研究の窓口は沢山あるほうがよろしかろう、というわけで文明学科での絶えざる共同作業の為に、他学部・他学科との組織的カリキュラム的な相互乗り入れ（例えば学生の単位振り替えなど）は一考されてもよいのではないかと思う。

また共同研究を可能ならしめている、いわばその動機であり発源となる前理解領域（「了解」）について研究する。少なくともそういういった学問的態度（構え）を訓練する。これは主に文明理論の領野かもしれないが、文明学科で行うべき大切なことである。

そしてやはり文明学科が忘れてはならないのは、常に現代、今自分が生きているこの文明との係わりを問題意識として持ち、その問題意識を常に確認してゆく作業である。そうした場として文明学科は、研究発表・シンポジウム・共同研究などを行なうが、それらとはまた別に学外での何かサロンのようなものも重要であろうと思う。私事で恐縮であるが、自分が学生、特に学部に入ってから間もない頃やはり「文明学科」について自分の問題意識をぶつけ、語り合う場を求めていた事を思い出す。そしてまた今でも、こうした若い力、強烈な問題意識が、文明学科を支え、活力あるものとしているのだと信じている。